KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

神田日勝記念館だより

神田日勝記念館 〒081-0292 北海道河東郡鹿追町東町3丁目2 TEL(01566)6-1555

牛 1964年

contents

2 開館十周年記念特集―一
「記念館開館十周年を迎えて」鹿追町長 吉田 弘志
3 開館十周年記念特集―二
神田日勝記念館十周年の歩み
4 神田日勝記念館開館十周年記念事業
神田一明の世界―時の深き淵から
美術講座―神田一明と神田日勝
町民絵画展
神田日勝記念館友の会が鹿追町文化賞受賞
神田日勝生誕祭
5 アート・キッズ・クラブ
子ども芸術鑑賞ツアー
子ども絵画教室―油絵講座
冬休み子どもワークショップ
春休み子どもワークショップ
6 開館十周年記念
『飯場の風景』感想文
第九回馬の絵作品展審査講評
7 寄稿文『「半欠けの馬」をめぐって』寺嶋 弘道
8 絵はがき四種類を新発売
後期常設展「神田日勝の初期作品をめぐって」
芸術鑑賞バスツアー
絵画教室―油絵講座
絵画教室―水彩画講座
感想ノートより⑰

2004.3.31
20

開館十周年記念特集―一

記念館開館十周年を迎えて

鹿追町長　吉田　弘志

神田日勝記念館は平成五年六月十七日に開館し、本年度十周年を迎えました。

開館に至るまでは、ご遺族のご協力や町有志の努力もあり、また神田日勝の絵に対する評価の高まりもあって、熱い期待を担ってオープン。開館年の来館者は六万人を越え、現在までに延べ三十九万人を越す人々が記念館を訪れています。これは、道内の公立の個人名を冠する美術館としては最高です。

翻って、内外を巡る社会情勢は、混迷を深め、さまざまな不安が人々の心を暗くし、未来に対する展望も厳しいものがあります。しかし、神田日勝の絵には、開拓の時代を生き抜いた人々の大地に根ざした魂が込められ、作品から発せられる作者のメッセージには、現代を生きる私たちの心の深くにまで達する力があるのではないかと思います。

農業を基幹産業とし、然別湖など風光明媚な自然にも恵まれた鹿追町に建つ神田日勝記念館は、芸術文化の拠点として、また、次代を担う子ども達を育てる社会教育施設として大事な役割を持っています。

また、記念館の開館に先立って設立された神田日勝記念館友の会も、展覧会事業の実施、日勝の命日にちなんで開催される馬耕忌、さらに開館記念祭としての蕪墾祭などの各種催しになくてはならない存在であり、この友の会が、本年度の鹿追町文化賞を受賞したことは、今までの活動が評価され、誠に喜ばしいことです。町民を始め、多くの日勝ファンに支えられていることを強く実感致します。

今後の展望としては、本格的な高齢化社会を迎え、ますます生き甲斐と生涯教育の重要性が増してくることが予想され、そのような中で、神田日勝記念館の果たす役割も広がってくることでしょう。また、記念館を全国に誇りうる美術館として発信していくことも忘れてはなりません。

思い起こせば、私が教育委員会に勤務していた三十年ほど前に、神田日勝の展覧会を鹿追で開催するため、帯広や周辺町村に宣伝のためのポスターを配って歩いたことがあり、当時、私も積極的に関わりを持った一人です。神田日勝の絵を多くの人々に見てもらいたいという思いでいっぱいでした。

太平洋戦争の末期に東京から鹿追に移住し、三十二才余で夭折した神田日勝の画業と生涯は、この大地に息づき、人々の感動を呼び、永く私たちの胸に残るものです。その想いを伝え続けることが重要なことです。

これからも、みなさまのご協力とご支援を、よろしくお願い申し上げます。

開館十周年記念特集―二

神田日勝記念館十周年の歩み

1

3

5

7

2

4

6

8

9

【平成五年度】

神田日勝記念館開館（写真1）
初代館長に米山将治就任
第一回馬耕忌（写真2）
神田日勝と一九六〇年代の美術―北の同時代者たち（写真3）
移動美術館―美へのいざない
高橋幸男展―北・光・大地
美術館講座（安達整氏）
芸術鑑賞バスツアー
絵画教室

【平成六年度】

赤レンガ建築賞奨励賞受賞
絶筆「馬」修復
館長に高橋揆一郎就任
『未完の馬』発刊（写真4）
在道独立作家展（写真5）
脇坂裕展
小坂国男展
加地保良木炭画作品展（写真6）
美術館講座（奥岡茂雄氏・土田久子氏）

【平成七年度】

第一回蕪墾祭（写真7）
第一回馬の絵作品展（写真8）
『画集・神田日勝』発刊
徳丸滋展（写真9）
新出紀久雄の水彩画
古賀喜久男の世界
渡邊禎祥個展
熊代弘法造形展
芸術鑑賞バスツアー
絵画教室（子ども部門開設）

開館十周年記念特集―二
神田日勝記念館十周年の歩み

10

11

12

13

14

15

16

17

18

【平成八年度】

第四回馬耕忌（写真10）
神田日勝と一九六〇年代の美術―寺島春雄（写真11）
北五人展＆北彩四人展（写真12）
戦没画学生作品展
伊藤恵美子個展
岡沼秀雄展
齊藤隆博展

【平成九年度】

練馬区立美術館所蔵作品展
*練馬区立美術館で「神田日勝と深井克美展」（写真13）
木田金次郎と神田日勝展
*木田美術館と同時開催
砂田友治展（写真14）
*記念館友の会五周年記念事業
『人と牛C』購入
北四人展＆北彩五人展＆北の風
春季平原社展移動展
子どもワークショップ（写真15）

【平成十年度】

開館五周年記念展―室内風景への軌跡
開館五周年記念式（写真16）
帯広信用金庫カレンダー原画展
北海道女流選抜鹿追巡回展'98
第四回蕪墾祭（写真17）
子どもワークショップ（写真18）
演劇「わたしの神田日勝」

19

21

23

25

20

22

24

26

【平成十一年度】

木下晋展―えんぴつの世界（写真19）
中西堯昭展
ホシバリョウミツ展
北の現代具象展
特別企画展―風土への視線（写真20）
神田日勝デッサン集発刊

【平成十二年度】

グループ環　油彩展（写真21）
新出紀久雄展
山本時市遺作展
子ども絵画教室（写真22）
子ども芸術鑑賞のつどい

【平成十三年度】

夭折画家の系譜展
宮沢克忠展（写真23）
人を描く展
西脇順三郎展
米坂ヒデノリ小品展
特別企画展　人間の情景―北に生きる人々展
ファミリー美術館事業―親子見学会（写真24）

【平成十四年度】

館長に小檜山博就任（写真25）
萬鉄五郎記念美術館所蔵作品展
新出紀久雄と水彩画の仲間たち展
熊代弘法作品展（写真26）
木村希八の仕事展
特別企画展―命の証としての馬
美術講座（伏木田光夫氏）
神田日勝記念館友の会創立十周年記念式

美術講座 ―関連事業

神田一明と神田日勝
2003年11月21日　鹿追町民ホール
講師：吉田　豪介氏

美術評論家で、市立小樽美術館の館長でもある吉田豪介氏を招き、神田一明と日勝兄弟の芸術の魅力について語られました。

二人の共通する資質として、頑固であることを挙げ、初期作品はモチーフが似通っていること、また、共通する要素として、戦後すぐの生活感あふれる表現、土臭い色彩、手堅いフォルム、逆遠近法的構図を挙げています。

日勝は部分から全体へとイメージを育てるのに対し、一明は空間全体の構造を最初に設定する手法をとっている点に相違が見られますが、ともに実在主義的表現を目指していたと述べています。

最後に、神田日勝記念館の研究に今回の展覧会が新たな展開を見せる契機となることへの期待を寄せました。

神田日勝記念館 開館十周年記念事業

神田一明の世界 ～時の深き淵から～

2003年11月5日（水）～30日（日）

神田日勝の実兄、神田一明の画業50年を集大成する39点の油彩画による自選展が、開館十周年記念事業の一環として開催されました。十勝管内では初の個展となり、会期中の入館者は、2,000人を越えました。

神田一明は、現在も旭川で精力的に制作を続ける洋画家。日勝より3才年上で、東京練馬に生まれ、弟日勝や家族とともに戦時疎開により鹿追に入植。帯広柏葉高校では小林守材の指導を受け、画家を志しました。東京美術学校（現東京芸術大）を卒業。1966年に北海道教育大学旭川校に着任し、99年に退官。同大名誉教授。行動美術協会、全道美術協会各会員。

日勝との影響関係を強く感じさせる初期の「廃屋」や「画室」から、人間の孤独や疎外感を表現した青を主調としたものに移行する作品群との対比から、兄弟のきずなと、二人の画家の独自の個性を感じ取れる展覧会になったようです。

神田日勝記念館友の会が鹿追町文化賞受賞

十一月三日　鹿追町民ホール

神田日勝記念館をサポートする民間組織として特色ある事業や展覧会の実施など、町民への芸術文化の振興や貢献が評価され、神田日勝記念館友の会が鹿追町文化賞を受賞しました。

文化祭記念式典では、会長の脇坂裕さんが代表して出席し、「十周年を期に受賞でき、大きな励みです。」と喜びを述べました。

神田日勝生誕祭

十二月八日　神田日勝記念館

展示室内での演奏会では、フルート・赤部里美さん、ピアノ・岡本奏絵さんの奏でるきらびやかな調べに聞き入り、その後の懇親会では、日勝の誕生を祝い、親睦を深めていました。

なお、この催しは、小檜山館長により、「日勝祭」と命名され、次年度以降も開催されます。

開館十周年記念 町民絵画展

二〇〇四年三月十八日～二十二日　鹿追町民ホール

開館十周年を記念し、町民絵画展が初めて開催されました。

鹿追在住であれば誰でも出品でき、油彩のほか水彩や水墨画など、全部で37点が展示されました。

絵画教室や彩の会、景墨会の会員も出品し、さらに笹川在住の真野正美さんの水彩画や帯広柏葉高校出身の佐藤万里絵さんの油彩などが目を引いていました。

アート・キッズ・クラブ

五月二十四日～二〇〇四年二月二十八日　鹿追町民ホール

土曜日活用として開始されたアート・キッズ・クラブも、後半期は、クリスマス・オーナメント、昔のおもちゃ、そして、ミニ絵本作りに取り組みました。八回全部出席した児童が三人。皆とても楽しく熱心に参加してくれました。

風車作りとクリスマス・オーナメント作りでは、笹川小学校の笹の子クラブも合流してにぎやかに行われ、また先生や父母の方々の協力も得て、今後の活動に、大きな励みになりました。

子ども芸術鑑賞ツアー

十二月十四日　北海道立帯広美術館

帯広美術館で開催された「木のワンダーランド」展を鑑賞。参加者は小学生九名。

木のパズルやこま、木の砂場など、直接触れて楽しめる展示内容。参加者は興味を持って鑑賞することができました。

当日は、パンフレットの他にワークシートも用意され、見るだけではなく、いろいろ体験して楽しめる工夫がされていました。

子ども絵画教室ー油絵講座

二〇〇四年一月六・七・八日　鹿追町民ホール

村上俊彦先生を講師に、実施されました。参加者は、小学生四名。

ひとりひとりに指導が行き届き、全員が作品を完成することができました。

一日目は、りんごの形や大きさを確かめながらのデッサン、油絵の具の使い方を学び、制作。二日目は、題材の陰影に注意しながら、画面を明るくする工夫をし、三日目は、神田日勝記念館を見学し、完成作品の合評会を行うなど、熱心に取り組みました。

冬休み子どもワークショップ「マイカップを作ろう！」

十二月二十六日　陶芸工作館

鹿追焼き用のねんどを用いて、マイカップ作りに挑戦しました。参加者は小学生二十五名。ろくろ台のにねんどをのせて、一生懸命、器の形に整えました。

完成した作品は、陶芸工作館の電気窯で素焼きし、釉薬をかけて仕上げられました。

春休み子どもワークショップ「ビニールチューブを作って遊ぼう！」

三月二十七日　鹿追町民ホール

帯広在住の造形作家、佐野まさの氏を講師に、透明なビニールチューブの中に風船を膨らませて入れたり、カラフルなテープを付けたりしてから、扇風機で風を送り、大きく膨らませてから、皆で広いロビーで、飛ばして遊びました。

参加者は、帯広ＹＭＣＡと、町内の小学生と幼児を合わせ、総勢三十名。

ビニールチューブのダイナミックな動きに、驚いたり歓声をあげたりして楽しく取り組んでいました。

開館十周年記念「飯場の風景」感想文

神田日勝の「飯場の風景」感想文の入賞者は次の通りでした。表彰式は、馬の絵作品展と併せ、十月十八日に行われました。

飯場の風景　1963年

●小学生の部

・最優秀賞

北海道教育大学附属旭川小学校六年　上西　希生

・優秀賞

美瑛町立旭小学校三年　寺林　拓人

美瑛町立旭小学校四年　草野　有香

・入　選

江別市立東野幌小学校一年　松本　ほのか

美瑛町立旭小学校四年　近藤　秀樹

江別市立東野幌小学校四年　松本　春花

●中学・高校の部

・最優秀賞

清水町立御影中学校二年　西　衣舞姫

・優秀賞

北広島市立緑陽中学校二年　中島　佳子

旭川藤女子高等学校一年　浅原　恵美

・入　選

北広島市立緑陽中学校二年　山口友理香

札幌市立稲積中学校三年　村上　卓生

鹿追町立鹿追中学校三年　菅　優理

北広島市立緑陽中学校二年　佐々木瑞穂

登別市立鷲別中学校二年　阪本　弘樹

●一般・学生の部

・最優秀賞

石狩市　葛西　庸三

・優秀賞

旭川市　上西　紀子

帯広市　志田　哲夫

・入　選

東京都　小金井市　近島　哲男

札幌市　田中　敏明

帯広市　古川　直嗣

滝川市　横山千鶴子

札幌市　近藤　健治

千歳市　三浦　緑

第九回　馬の絵作品展審査講評

審査委員長　齊藤隆博

今年も昨年を上回る一七五二点の応募がありました。鹿追町民ホールに全作品を展示しましたが、会場は皆さんが描いた数千頭の馬で熱気につつまれています。作品は直接その場で描いた感動が伝わってくるものばかりで、入選作品を選ぶのに審査員一同大変苦労しました。

中でも、文部科学大臣賞の上野樹君（釧路富原中学校）の作品は、馬の生命力や躍動感がよく表現された秀作です。しっかりした構成や、精魂込めた描写は見る者を圧倒します。馬の後ろ姿は新鮮です。この他の入選者にも、素晴らしい感性豊かな作品が見られました。

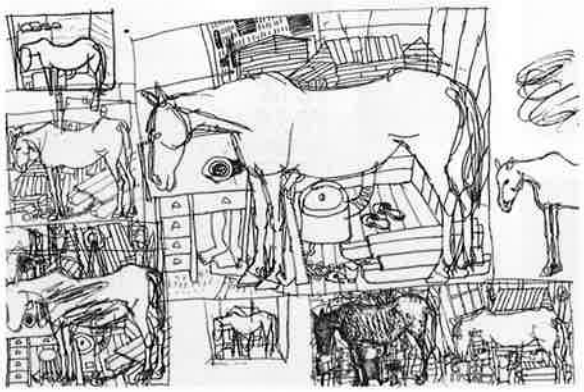
特徴的なのは、全体のレベルが向上したことはもちろん、馬の表情や親子愛など、積極的に馬との触れ合いを主題にした作品が多くなったことです。審査委員特別賞（学校賞）の初山別中学校は生徒作品の完成度が高く、一生懸命に取り組む姿勢が高い評価を得ました。

さて、開館十周年の神田日勝記念館は晩年の代表作「室内風景」を展示しています。この記念の年に、大変多くの作品の応募があり、馬に寄せる温かい皆さんの気持ちが強く伝わる作品展になったことを関係者一同感謝しております。

また、皆さんに親しまれた「馬の絵作品展」は来年十周年の節目を迎えます。今年は北海道の作品に優位が目立ちましたが、大きな記念展にしたいと考えております。ぜひ来年も全国各地から大勢の応募をお待ちしております。

寄稿文 「半欠けの馬」をめぐって

寺嶋　弘道



馬（デッサン）　1970年

神田日勝最晩年の作品「馬（絶筆）」は人の想像力を強烈に刺激する作品だ。馬の胴体半分が完璧に描かれながら、描きかけで中断してしまっているので、この絵と向き合うと想像はどんどん連鎖しさまざまに思いを巡らせてしまう。もう少しこの画家が生きていたなら…、もしこの絵が完成していたとすれば…、次の馬の絵は…と。歴史に「もしも」があり得ないと分かっていてもである。

以前に私はこの半欠けの馬を題材にして、鑑賞ワークショップを行ったことがある。絵を見るという行為が見る側の主観的な情動作用であるとするなら、未完成のこの作品は観者の心に強く働きかけるからである。

「もし、私が画家だったら、この絵はこう仕上げます」これがワークショップ参加者に与えたテーマである。図版コピーを一人ひとりに用意し、直接そこに絵やあるいは言葉で自由に完成の姿を描き込んでもらった。そして、なぜそう考えたかについて、依田勉三の有名な一句「開墾の始めはブタと一つなべ」にならって「開墾の（　）は（　）と（　）」の空欄を埋めてもらうことにした。

結果は実に多様だった。牧場や木柵を描いた者、何頭もの馬を描き足したり子馬との光景を描いた者、大木の陰にたたずむ馬の情景に仕上げた者など、多彩な「完成作」が出来上がった。横たわる人物を描き加えた作品には「開墾の始めは馬と一つ屋根」と一句が添えられていた。遠景に山を描いた作品には「開墾の青空は愛する馬とヌプカウシ」、凍てつく朝の雪原の情景には「開墾の友は大自然と一頭の馬」、後ろ足を蹴上げて暴れる馬には「開墾の農耕馬は過労といらだち」とあり、皆をなるほどとうならせたのである。

では「もし、神田日勝だったら」この作品をどう完成させただろうか。生涯にわたる馬の絵の軌跡を辿り、そして最晩年の素描に着目してみるとこの画家の構想を推察することができる。一冊のスケッチブックの中に繰り返し描かれたその素描には、屹立する男、荒廃した小屋、板壁と板の間、机、丸イス、ストーブ、馬ソリ、ノコギリ、スリッパ、魚の骨などが馬とともに登場する。彼は繰り返し構図を検討し、これらのモチーフの統合を研究していたのである。同じく晩年の「静物・家（未完）」と題された十二号の油彩画は小屋と机上の魚骨を描いたもので、この時期の彼の構想を跡づけるといえよう。

そして驚いたことに、それらの素描の一枚には油彩画とほぼ同じ姿の半欠けの馬が描かれている。紙の端に小さく描かれたその馬は、硬直する前足、がっしりとした肩骨、鼻筋の通った顔つき、強調された目と耳などに油彩画と共通する特質がある。あるいは無意識であったにせよ、半欠けの馬は半身の姿として一度描かれているのである。とすれば…。

画家は死んでも、絵は存在し続ける。だから、残された作品の未完成の刺激に、人々は想像力をたくましくするのである。「もしも」という反実仮想を越えたところに、この未完の馬は存在している。

寺嶋　弘道
美術館学芸員。1955年滝川市生まれ。78年金沢美術工芸大学卒。道立三岸好太郎美術館、道立近代美術館の学芸員を経て、89年から道立帯広美術館の開設準備を担当し、91年の開館時から同館学芸課長。

感想ノートより―⑰

神田日勝を初めて見ました。32才の若さで亡くなった日勝の一生がつまった展覧会でした。私は滋賀の芸大に通っているのですが、今日は帯広の友達（同じ大学）の家に遊びに来ていて、室内風景のポスターにもひかれ、みにきました。
未完の馬が何ともいえないデス…。　9/2
成安造形大学2回生　N.N

馬（絶筆）は毛の一本一本にまで迫力が感じられた。
日勝がこれほどたくさんの画風が描いていたのに驚いた。
馬（絶筆）は未完成作品であるにも関わらず想像力をかきたてる、れっきとした完成品となっていることが一番印象に残った。
背景と残りの体を想像すると面白い。　札幌　H（大学1年）

青い青い秋の空と雲、光り輝く太陽
その美しい風景を一瞬のうちに心に深く重い絵
こんなにすごい絵をこんなに短い生涯の中で描きつくす
とても感動しました。
馬の目がとても優しく、作者の愛を感じました。
思いきってこの北国の美術館まで来てとても幸福でした。
2003 9/21(日)　山梨県甲府市　50才　女性
60才　男性

神田日勝さんの絵画は初めて見ました。北海道の大地にしっかりと根をはり、生きている人間と馬の姿というものがとてもよく伝わってきました。
開拓時代の苦労、馬の疲労、いろいろなものが伝わってきます。
開拓時代の生活がそのまま描かれている力強い絵だなあと思いました。
感動しました。今日は自転車で来てよかったです。
2003.10.9.　H.T.

日勝さんは開拓という生活の中から生まれた絵、
胸にせまるものがある
一明先生は知的で学者、その違いがあるのに
不思議と画風に共通点があるように思える
それは血を分けた兄弟だからなのかな、
共感を呼ぶいくつかの絵に感動した。
2003.11.24.　十勝人

絵はがき四種類を新発売！

平成十五年度は、絵はがき四種類を新たに製作し、全部で三十三種類になりました。受付で販売中です。

馬　1957年

ヘイと人
1969年

家　1960年

自画像　1956年頃

後期常設展「神田日勝の初期作品をめぐって」

神田日勝が二十代前半に描いた「自画像」「風景」「馬」などを中心に、油絵を始めた頃の初期作品に焦点をあてて小コーナーに展示しています。
対象をしっかり見つめて描こうとする真摯な制作態度がうかがえます。

風景　1956年

芸術鑑賞バスツアー

札幌市　十月十九日（日）

「北の巨匠―岩橋英遠・片岡珠子」、これくしょんぎゃらりい「愛される風景―故郷と名所」展を北海道立近代美術館で、さらに札幌彫刻美術館で常設展「悲しみと苦悶の日々」を鑑賞し、二十九名の参加者は芸術の秋を満喫していました。

絵画教室―油絵講座

神田日勝記念館　十一月十七・十九・二十一日

村上俊彦氏を講師に、参加者は五名。
今回は、人物画を描くこつを学び、受講者は熱心に取り組んでいました。

絵画教室―水彩画講座

鹿追町民ホール　二月二十九日・三月二十八日

十一年ぶりの水彩画の講座が新鮮に受けとめられ、新たな参加者を含め受講者は九名。
講師は、荒土会会員の中谷茂弘氏。花瓶や野菜などを題材に、構図や色合い、水の加減などに留意して熱心に取り組んでいました。